

# Takayasu Disease On the Centenary of its Discovery : Only One Case Report in Japanese Made World-Famous Takayasu Disease

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/27824">http://hdl.handle.net/2297/27824</a>

## 高安病発見から1世紀

— たった1例の日本語症例報告から世界の高安病へ —

## Takayasu Disease On the Centenary of its Discovery

— Only One Case Report in Japanese Made World-Famous Takayasu Disease —

金沢大学医薬保健学域医学系視覚科学  
(眼科学)

杉 山 和 久

十全医学会雑誌への投稿数の減少が叫ばれて久しい。よい仕事は英語論文にして一流と言われる欧米の雑誌へ投稿される。確かに日本語論文では日本人医師しか読まないで、その気持ちはよくわかるし、どこの医学部教室も英語論文を出してこそ業績として評価されると考えているのであろう。世界の中の日本である限り、また、よい研究を世界中の医師や医学研究者に知ってもらいたいのは当然の心理であり、その結果として十全医学会雑誌の投稿が減るのは、むしろ自然の流れであるのかもしれない。しかも、いい研究は英語で書かれてしまうため、日本の医学雑誌に投稿される論文の内容も低下傾向にあると言わざるを得ない。まさに、十全医学会雑誌を含む日本語医学雑誌が危機的状況にあると言えよう。

明治29年(1896年)11月に第四高等学校十全会の十全会会誌の第1号が発刊され、以来現在に至るまで十全医学会雑誌には115年の歴史がある。その長い年月の間に多くの論文が掲載されてきた。その中の一つに高安右人の原著論文がある。今から丁度103年前の明治41年(1908年)4月に福岡市にて開催された第12回日本眼科学会総会で、当時金沢医学専門学校眼科教授の高安右人が「奇異なる網膜中心血管の変化の1例」を報告した。これが、後に「高安病」と呼ばれる眼を含めた全身疾患の発端となった。高安病発見100年の記念すべき2008年4月の第112回日本眼科学会総会で、「高安病シンポジウム」を著者らが企画した。近年、眼科領域では診ることが稀になった高安病を、会員諸氏とともに勉強してこの病気への理解を深めるとともに、たった1例の報告が新疾患の発見につながった症例報告の重要性を再認識した。

高安右人は明治20年東京帝国医科大学を卒業、翌年に第四高等中学校医学部眼科医長として金沢に赴任した。同27年第四高等学校医学部付属病院長、同34年に2年間のドイツ留学から帰国し金沢医学専門学校長、大正12年に金沢医科大学(旧制)の初代学長に就任した。高安が日本眼科学会総会で高安病の1例を報告した際、大西(九州大学の前身の福岡医科大学眼科教授)は「同様な眼底変化を呈し、同時に両側の橈骨動脈の脈拍消失を併合した1例」を追加した。これが1908年の日本眼科学会雑誌に抄録として掲載されている。高安の原著論文は同年に金沢医学専門学校の十全会雑誌に掲載された。高安、大西の報告そして自験例をもとに1921年東大眼科の中島實(後に金沢大学、名古屋大学、東大の眼科教

授を歴任)は新しい疾患単位として「高安病」を提唱した。その後わが国の眼科医によって多数の症例報告がなされた。上半身の虚血症状を中心とした検索が行われ1948年清水、佐野により「脈なし病」と命名された。その後高安病の病変は、大動脈弓とその主要分枝にとどまらず腹部大動脈、腎動脈など広い範囲の血管に及ぶことが判明した。高安病の眼症状は、大動脈弓、頸動脈の狭窄、閉塞による血行不全による慢性の網膜・脈絡膜の血液循環不全によって生ずると考えられる。

高安病は我々医師にとってまさに「温故知新」ではないかと思われる。我々が高安病から学んだことは、網膜・脈絡膜の虚血に対する網膜血管の反応形式(血管拡張、透過性亢進、毛細血管瘤形成、血管閉塞、動静脈吻合、血管新生)の病態生理をどう理解するかという、現代でも通用する問題であった。そして、たった1例を丹念に観察し記載するという、臨床医学の原点であった。高安病の眼底病変を理解することで糖尿病網膜症、網膜中心静脈閉塞症など閉塞性血管病変の病態生理の理解に役立つことを再認識した。早期発見と内科的、外科的治療の発達によって、眼病変をもつ高安病患者を診ることは稀有となったが、高安病は「眼底低血圧、慢性虚血がもたらす網膜血管の反応形式」という問題の提起とその解答を我々に与えてくれたのである。

さて、話は十全医学会雑誌に戻るが、明治41年の十全会雑誌に掲載された日本語のたった1例の症例報告の論文が、世界に通用する高安病の発端であった。時代背景はかなり異なるが、1例1例の症例報告の積み重ねが臨床医学発展の原動力のはずである。何でもかんでも症例報告はいただけないが、症例報告を軽視する姿勢はいかなるものかと思う。多数例での統計処理は勿論重要であるが、その多数例にもかなりのバリエーションがある。典型例を著しく抜け出した症例こそ、その疾患の病態解明の鍵があるかもしれない。また、日本語論文軽視の姿勢が、日本語医学雑誌の投稿数減少につながっているのは間違いない。しかし、本当に良い論文は、日本人には日本語で、世界に対しては英語で発表されるほうがわかりやすい。1部の日本語雑誌と英文雑誌が著作権を共有するのは難しいのであろうか? 英文雑誌の価値ある論文は日本語で日本の医学雑誌に載せるシステムがあっても良いと思うが・・・私は日本人医師のための、そして金沢大学医学部同窓生のための、伝統ある十全医学会雑誌が発展することを心より祈念している。